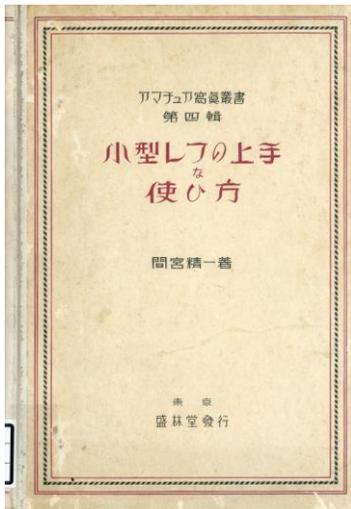


日本カメラ博物館 JCIH ライブラリー
学芸員 宮崎真二

まみやせいいち
間宮精一（1899-1989）は、静岡・大仁に生まれ、実業家兼発明家の父親が創案した金庫の製造販売を手伝います。一方で写真に熱中し、浅草の写真機店「ヤマト商会」に集う面々で結成された「ヤマト写真倶楽部」にて、木村伊兵衛らと交流を深めました。しかし、関東大震災の痛手などで金庫事業は不振に陥ってしまいました。そこで新事業を模索し、金銭登録機（レジスター）の製造に転換しました。製品が博覧会で賞を受けたことから、藤山愛一郎の支援を受けて「日本金銭登録機株式会社」を設立し、技師長に就任しました。

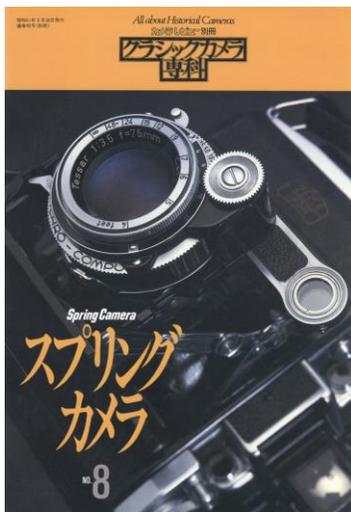


『小型レフの上手な使ひ方』

本業の傍らで、間宮は熱心に写真作画活動を続けました。『アサヒカメラ』では、1933 年ごろから作品と技術指導記事が見られます。1937 年に『小型レフの上手な使ひ方』（盛林堂）、翌年には『ライカの使ひ方』（アルス）を著しました。特に後者はスナップ撮影に便利なよう速写ケースを改造する例や、「ライカ用品考案の色々」という章を設けるなど、創意工夫に長けた様子が見られます。

やがて同社は米国のナショナル金銭登録機（NCR）から共同事業化の提案を受け「日本ナショナル金銭登録機株式会社」となりました。これを受けて間宮は 1937 年に退社し、写真作家の経験を基に独創的なカメラを創ることを決めました。このころ写真クラブ活動を通して銀行家の子息、菅原恒二郎と出会います。間宮からカメラ製造の話聞いた菅原は共同事業化を提案し、「マミヤ光機製作所」の事業がスタートしました。

1940 年の春に本郷・東大前の銭湯を購入して工場とし、同年にバックフォーカシング機構を備えた中判スプリングカメラ「マミヤシックス」を完成させました。本機は海外製品にひけを取らない国産カメラとして、戦中も生産継続が許された数少ない製品でした。『アサヒカメラ』1941 年 1 月号には「外貨獲得の尖兵（輸出カメラ製造工場訪問記）」として、社名と製品名が伏せられていますが、工場で生産を行う様子がレポートされています。



『カメラレビュー
クラシックカメラ専科』8号

戦後も間宮はカメラ設計活動を続け、1949 年にはフィルムを入れると自動的に 1 コマ目にセットされ、フィルム送りとシャッターチャージが連動する「オートマツト」機構を備えた二眼レフカメラ「マミヤフレックスオートマツト A」と、16 ミリフィルムを使用する極小型カメラ「マミヤ 16」を製品化しました。1951 年には国産カメラの発展に貢献した功を賞し、藍綬褒章を授与されています。また『アサヒカメラ』同年 7 月号には自叙伝「カメラ設計技術者の体験から」が掲載されています。

カメラメーカーの代表兼設計者として活動した間宮でしたが、1955 年に第一線を退いて悠々自適の生活を楽しみ、1969 年には勲四等旭日小綬章を受けています。また 1986 年には『カメラレビュークラシックカメラ専科』（朝日ソノラマ）8 号にて、自身の半生とマミヤシックスについて語っています。